解説

今月の御教え

障子一重がままならない人の身である。

……「天地は語る」第五十一条……

私達はテレビや雑誌、ＳＮＳ等により膨大な情報を得るうちに、何時しか世の中の事を何もかも知っているかのように思え、天地自然への畏敬の念さえなくなってきているのです。しかし、人間の力は知れたもので、襖一つ隔てれば、隣で人が何を話しているかも全く分からないものであります。それに対して天地の親神様はどうでしょうか。

白神新一郎先生が、教祖広前に参拝した時、教祖様から「貴方の教会の信徒であろう、入江カネという者がここへ(教祖広前)日参しておる。その者にこれを渡すように」と、「天地書附」を託されたのですが、当時の交通状況からして大阪から金光へ日参するなどは到底考えられません。白神先生は怪訝な思いで、帰阪して調べてみると、確かに信徒の中に、その人がいたのです。そこで、その入江カネさんを呼び出し、教祖様の言葉を伝えると、「私はその日暮らしで、仕事を終えた後、夜な夜な御教会の門前に参拝している身であります。とても金光様の広前に御参りなど出来ません。それでも一生に一度でも金光様にお会いできたらと日々祈っております」と申されたのを聞いて白神先生は改めて金光様の正に神ながらの御神徳に感慨を新たにしたとの事でした。

このように、私達は幸いにも「天地一目に見て下さっている」親神様を信心させて頂いているのでありますから、一層、信心進修に勤め御蔭を受けなくてはならないと思います。